令和6年度　健大スカラシップ選抜

過去問冊子

◪ 国語（解答付）

高崎健康福祉大学

Takasaki University of Health and Welfare

〒370-0033 群馬県高崎市中大類町 37-1 TEL 027-352-1290 FAX 027-353-2055
URL https://www.takasaki-u.ac.jp E-mail admission@takasaki-u.ac.jp

国語

（解答番号 1 ～ 25 ）

第1問

次の問いに答えなさい。

問1 (1)～(5)の傍線部のカタカナを漢字にしたとき、それと同一の漢字が含まれているものを、各群の①～⑤の中から、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 1 ～ 5 。

(1) 彼のデビュー作は当時の文壇ではセンエイ的な内容であった。 1

① 過去のエイコウにとらわれていると前に進むことはできない。
② 情報をエイゾク的に保管するために、電子データと紙の両立てを選択する。
③ 学校では生徒のためにエイセイ環境を整える必要がある。
④ そのカメラマンは動物園でゾウをサツエイしていた。
⑤ 新型車両は前と比べてよりエイカクなデザインになった。

(2) ライオンは草原の食物レンサの頂点にいる。 2

① ある国は情報が全くなかったので、サコク状態であった。
② ジュンサはいつものように交番で当直勤務中であった。
③ サジョウの楼閣とならないよう綿密な計画を立てる。
④ 長い間オトサタのなかった妹から連絡がきた。
⑤ 管理職として各部署に仕事のサハイをする。

(3) 品質のテイカが問題になる。 3

① これくらいの変化はソウテイしていたので問題ない。
② 試験でカンニングをしてテイガクを命じられた。
③ 彼の行為はテイキュウで唾棄すべきものだった。
④ 彼はテイネイな言葉遣いをする人である。
⑤ 日本国内の法律にテイショクする場合がある。

(4) 彼はついに前人ミトウの成績を残した。 4

① 話し合ううちに二人は意気トウゴウした。
② ケイトウ立てて勉強する必要がある。
③ その気迫にただアットウされてしまった。
④ 昔からの方法をトウシュウする。
⑤ 彼の理論は終止、トウテツしていた。

(5) 皆が慌てるなか、彼は一人ユウゼンとした態度をとった。 5

① 彼女は問題を冷静にとらえるヨユウがなかった。
② 自然は人知を超えたユウキュウの時間を感じさせる。
③ 山のユウダイな眺めに深く心を打たれた。
④ それらの作品にはユウレツをつけがたい。
⑤ ユウシキシャを集めて会議を開く。

問2　(1)〜(5)の傍線部のカタカナ部分を漢字にしたとき、それと同一の漢字が含まれているものを、各群の①〜⑤の中から、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 6 〜 10 。

(1)　自分の過去の過ちを戒めるために、ハンセイする必要がある。 6

① 入社と同時に文房具屋でハンコを購入する。
② 戦争によって他国をセイフクすることによって領土を広げた。
③ 一人暮らしを始めて最初の長期休暇に実家にキセイする。
④ 録音された演奏は実際の演奏よりハンオン低かった。
⑤ 役所に住民の意見をまとめたセイガン書を提出する。

(2)　父親は出張で毎月北海道と東京をオウカンした。 7

① 国際社会でカンセツ的に影響を与える。
② 中央のクーデターにコオウして各地で反乱が起こる。
③ 都市の骨格的な道路網のカンセン道路。
④ 警察が証拠品をオウシュウした。
⑤ 積雪により多くの車が立ちオウジョウした。

(3)　被災した地域に義援金としてキフをする。 8

① 親戚の家にキシュクする。
② 精神的なフタンを強いられる。
③ 親には子どものフヨウ義務がある。
④ 職業にキセンなし。
⑤ 職人としての腕をハッキする。

(4)　現代の技術を用いたトクシュ効果。 9

① 彼はジントクに恵まれていて周りの人に助けられている。
② 履歴書のトクギの欄に記入する。
③ 面接でトクイ科目を聞かれた。
④ シュコウを凝らした作品。
⑤ そのサッカーチームはケンシュ速攻なことで有名だ。

(5)　彼は入学のヨウケンを満たしている。 10

① 彼女は海外でヨウサイを学んだ。
② 道具のケンマを欠かさない。
③ 彼女はシステムの管理と実務をケンニンした。
④ 彼は大企業のヨウショクに就いた。
⑤ ヨウコウの照り付けるグラウンド。

第2問　次の【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

【文章Ⅰ】　次の文章は、ドミニク・チェンの『未来をつくる言葉――わかりあえなさをつなぐために』の一部である。なお、表記を一部改めている。

幼い頃から、日常生活を「翻訳」が満たしていた。家庭や学校で飛び交う複数の言語間で、時には言葉で表現する喜びに打ち震え、時には口から言葉が出てこないもどかしさに身悶えすることもあった。

ある時から、言葉を吐くという何気ない些細なコミュニケーションのひとつひとつが翻訳行為なのだと思えるようになった。そこから、人の話を聞いたり、本を読んだりすることがさらに好きになった。誰が何語で話していようと、内容そのものへの興味に加えて、当人が「何を翻訳しようとしているのか」というプロセスにも関心を持つようになったのだ。

ある人が任意の言語で話している時、その人は自分の体験を通じて感じたことを、相手の知っている言葉に「翻訳」して話している。同時に、その翻訳行為から常にこぼれ落ちる意味や情緒もある。A その隙間をなんとか埋めようとする仕草に、翻訳する人に固有の面白さが現れる。

わたしが学んできた数多の言語は、自分や他者の感覚を表現し、相互に伝えようとする「翻訳」の技法だった。今日わたしたちが紐解くことのできる歴史には、過去の無数の人々が発見し、試行錯誤してきた翻訳の表現が織り込まれている。今、わたしたちがその知識と経験を何のために受け継ぐのかといえば、わたしは互いの「わかりあえなさをつなぐために」と答えたいと思う。異質な個人同士は、この情報社会でますますつながっていくだろう。そんな時代に生きる人間として抱く、ある種の危機感から生まれる考えかもしれない。

今日、インターネットを介して、わたしたちが見知らぬ他者と接触する機会はますます増えているが、そこでは新たな関係性が紡がれる可能性と、異なる価値観を持つ人間同士が分断される危険性の両方が見られる。B しかし、この二つの動向は一見矛盾するようでいて、人間の社会が新しい言語を獲得するために通過する必要なステップを共に指し示している。

たとえば、今日のTwitterに代表されるＳＮＳ上では、互いに「わかりあえる」集団と「わかりあえない」集団の区分がますます明確に浮き上がってきている。先に述べたあいちトリエンナーレ２０１９の期間中には、問題とされた表現作品の文脈や背景は削ぎ落とされて、表面的な形象だけを巡って、誹謗中傷が交わされた。

この構図は、広く政治や政策のあらゆる話題で繰り返されてきたものだ。検索や閲覧の履歴データを基に、利用者の嗜好性を捕捉する情報技術によって、各人がそれぞれの価値観の皮膜に閉じ込められ、異なる価値観を許容できなくなる現象はフィルターバブルと呼ばれる。スマートフォンが世界中に浸透し始めた２０１０年代初頭から世界中で続いているが、C この議論は情報技術によって生み出されたものではない。情報技術は、人間の社会にもとより存在する傾向を強化しているに過ぎない。わたしたちは自己の身体という原初のフィルターバブルを持って生まれてくるのだ。

それでも「言語」の持つ力によって、世界を覆う多種多様さをつなぎとめ、それらの間を行き来することができる。複数の文化に包まれてきたわたしは、こどもの頃から今に至るまでそのような言葉に心を動かされてきたし、おそらく、これからも同じようにフィルターバブルを越境する術を探していくだろう。

結局のところ、世界を「わかりあえるもの」と「わかりあえないもの」で分けようとするところに無理が生じるのだ。そもそも、コミュニケーションとは、わかりあうためのものではなく、わかりあえなさを互いに受け止め、それでもなお共に在ることを受け容れるための技法である。「完全な翻訳」などというものが不可能であるのと同じように、わたしたちは互いを完全にわかりあうことなどできない。それでも、わかりあえなさをつなぐことによって、その結び目から新たな意味と価値が湧き出てくる。

現代の情報環境で、見知らぬ他者と共在感覚を得られる範囲は依然として狭いままだ。スマートフォンやＰＣのスクリーンの向こう側にも、自分と等しく生命的なプロセスを生きる同輩が存在しているのだという当たり前のことを、理性だけではなく身体にも訴える「言語」が必要となる。

D 幸いにして、そのためのヒントは、この世界の歴史のなかに満ち溢れている。たとえ生物学的な子や親がいなかったとしても、わたしたちは自らの生のプロセスを託す相手を見つけながら生きている。友人や恋人、仕事仲間、もしくは師弟といっ

た関係性のなかで、わたしたちは共に在ると感じられる場をつくりあげる。

互いの一部をそれぞれの環(注2)世界に摂(と)り込みつつ、時に「親」として、また別の時には「子」として関係することができる。そう望みさえすれば、人は誰とでも縁起を結び、互いの「わかりあえなさ」を静かに共有するための場を設計(デザイン)できる。なぜなら、わたしたちは自分たちが使う「言葉」によって、自身の認識論を変えられるからだ。

差異を強調する「対話」以外にも、自他の境界を融(と)かす「共話」を使うことによって、関係性の結び方を選ぶことができる。近代社会では、長らく対話こそが民主主義で合理的な議論を牽引(けんいん)すると考えられてきたが、今日の社会はそのための合理性を十分に発揮できないことを露呈してしまっている。この状況に対して、人の合理的な認知能力を引き上げようという努力も必要かもしれない。だが、それよりもまずは異質な他者と自分を架橋するための心理的な土台を築くことこそが重要だと思う。

わたしはこれまで、表現とコミュニケーションの関係について考え続けながら、生きている人間同士のコミュニティ、生者と死者が交わるインタフェース(注3)、そして人と微生物をつなぐロボットを研究してきた。好奇心の赴くままに行ってきたことだが、あらためて振り返れば、家族、社会、自然環境との関係における分裂に抗(あらが)うための方法を探ろうとしてきた。自分自身のなかにも吃音(注4)という「わからなさ」が同居しているし、多言語間の翻訳だけではなく同じ言語の話者同士でも意思の疎通が図れない状況を、当事者として生きてきた。

いずれの関係性においても、固有の「わかりあえなさ」のパターンが生起するが、それは埋められるべき隙間ではなく、新しい意味が生じる余白である。このような空白を前にする時、わたしたちは言葉を失う。そして、すでに存在するカテゴリに当てはめて理解しようとする誘惑に駆られる。しかし、じっと耳を傾け、眼差(まなざ)しを向けていれば、そこから互いをつなげる未知の言葉が溢れてくる。E わたしたちは目的の定まらない旅路を共に歩むための言葉を紡いでいける。

（注）1　あいちトリエンナーレ…愛知県で２０１０年から3年ごとに開催されている国際芸術祭。

2　環世界…それぞれの生物が知覚する世界は客観的なものではないという考え方から生まれたその世界自体のこと。

3　インタフェース…情報の授受を行うシステム間の手順、または、その接続を行う部分をいう。

4　吃音…話す時に最初の一音に詰まってしまうなど、言葉が滑らかに出てこない発話障害の一つ。

（ドミニク・チェン『未来をつくる言葉――わかりあえなさをつなぐために』）

【文章Ⅱ】　次の文章は、平田(ひらた)オリザ『わかりあえないことから――コミュニケーション能力とは何か』の一部である。なお、表記を一部改めている。

日本のこの狭い国土に住むのは、決して日本文化を前提とした人びとだけではない。

だから、この新しい時代には、「バラバラな人間が、価値観はバラバラなままで、どうにかしてうまくやっていく能力」が求められている。

私はこれを、「協調性から社交性へ」と呼んできた。

（中略）

この社交性という概念は、これまでの日本社会では「上辺だけのつきあい」「表面上の交際」といったマイナスのイメージがつきまとった。私たちは、「心からわかりあう関係を作りなさい」「心からわかりあえなければコミュニケーションではない」と教え育てられてきた。

（中略）

心からわかりあえることを前提とし、最終目標としてコミュニケーションというものを考えるのか、「いやいや人間はわかりあえない。でもわかりあえない人間同士が、どうにかして共有できる部分を見つけて、それを広げていくことならできるかもしれない」と考えるのか。

（中略）

好むと好まざるとにかかわらず、国際化する社会を生きていかなければならない日本の子どもたちに、より必要な能力はど

ちらだろう。もちろん協調性がなくていいとは言わないが、日本の子どもたちは世界標準から見れば、まだまだ集団性は強い方だ。ならばプラスαの能力として、これからの教育が子どもたちに授けていかなければならないのは、この「社交性」の方なのではないか。

（平田オリザ『わかりあえないことから――コミュニケーション能力とは何か』）

問1　傍線部A「その隙間をなんとか埋めようとする仕草に、翻訳する人に固有の面白さが現れる」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 11 。

① 自らが感じたことを相手に伝わる言葉で表現しきる語彙力の豊富さに、その人独自の努力が現れるということ。
② 自らが感じたことを相手に伝わるようにジェスチャーで説明する姿に、その人独自の個性が現れるということ。
③ 自らが感じたことを他者に伝わる言葉で表現しようと試行錯誤する姿勢に、独自の面白さが現れるということ。
④ 自らが感じたことが他者に伝わったときの喜びを共有できる楽しさに、対話の本来の目的が現れるということ。
⑤ 自らが感じたことを他者に伝えようとするプロセスに、それぞれの言語が持つ規則や特徴が現れるということ。

問2　傍線部B「しかし、この二つの動向は一見矛盾するようでいて、人間の社会が新しい言語を獲得するために通過する必要なステップを共に指し示している」とあるが、「必要なステップ」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 12 。

① 互いの社会の相違点を明確に分け、対話を通じて理解し、受け容れること。
② 互いの社会の「わかりあえなさ」を留保し、背景の思想や文化を考えること。
③ 互いの社会の「わかりあえる」ところを認識し、その領域を拡大していくこと。
④ 互いの社会の「わかりあえなさ」を受け止め、異なる価値観を理解しようとすること。
⑤ 互いの社会の価値観で他者をとらえることから脱し、相手の立場を理解すること。

問3　傍線部C「この議論は情報技術によって生み出されたものではない」とあるが、なぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 13 。

① そもそも、わたしたちはそれぞれの身体という原初的なフィルターバブルを持って生まれてくるから。
② そもそも、わたしたちは異なる価値観と出会ったときに、その背景や文脈を排除して考える特徴を持つから。
③ そもそも、わたしたちは世界の多様な価値観と出会い、それらの問を行き来する運動性を持っているから。
④ そもそも、わたしたちは他者の言葉や意見に応じて反応する心と、価値観を越境する可能性を持つから。
⑤ そもそも、わたしたちは嗜好性や多様性を持っており、それらの特徴は情報技術が解明したものではないから。

問4　傍線部D「幸いにして、そのためのヒントは、この世界の歴史のなかに満ち溢(あふ)れている」とあるが、「ヒント」とは何か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 14 。

① 多くの人と縁起を結ぶことで親と子のような関係を結ぶ方法を見出(みいだ)した歴史。
② スマートフォンの向こう側と同様に遠くにいる相手と交流を続けてきた歴史。
③ 互いの一部分をそれぞれの環世界の一部として共有し、わかろうとした歴史。
④ 生物学的な親子関係でなくても対話を通して理解し、共に生き抜いてきた人の歴史。
⑤ 「わかりあえなさ」を共有し、共に在ることができる場所をつくってきた歴史。

問5　Tさんは【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで「コミュニケーション」について自分の考えを整理するため、次のような【メモ】を作成した。これについて、後のⅰ・ⅱの問に答えなさい。

【メモ】

〈1〉共通する内容　［どちらもコミュニケーションについて述べている。］

⬅

〈2〉「これからのコミュニケーションに必要なこと」について。
【文章Ⅰ】［　X　］
【文章Ⅱ】［「社交性」］

⬅

〈3〉まとめ　［　Y　］

ⅰ　Tさんは〈1〉を踏まえて〈2〉を整理した。空欄 X に入る最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。解答番号は 15 。

① 対話を通して差異を明らかにして合理的な結論を出すこと。
② 他者との境界をなくす共話によって心理的な土台を築くこと。
③ 多言語の獲得を通して、多くの他者と対話を行うこと。
④ 共話によって交流を深め、他者との関係性を強固にすること。

ⅱ　Tさんは〈1〉〈2〉を踏まえて「〈3〉まとめ」を書いた。空欄 Y に入る最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。解答番号は 16 。

① わたしたちの認識を変える言葉の力を使うことで、最終的には他者と「わかりあえる」姿勢で対話を始めること。
② あらゆる環境における分裂を認め、それぞれの集団内での結束を高めるための努力を続けること。
③ 「わかりあえない」ことを認め、相手との境界をなくしてから共有できる部分を広げていく努力をすること。
④ 「わかりあえない」ことが生み出す価値を認め、対話の中から共通点を探し、完全に理解する努力をすること。

問6　傍線部E「わたしたちは目的の定まらない旅路を共に歩むための言葉を紡いでいける」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 17 。

① わたしたちは「わかりあえるもの」と「わかりあえないもの」の二つに分裂させることが我々の可能性を狭めていることに気づくことが必要であり、それは身体の境界を基に議論しているものであるから、もっと根本的な話から始めるべきだ。
② わたしたちのコミュニケーションのひとつひとつは自分の感情等を他者のわかる言葉で紡ぐ翻訳行為であって、その翻訳行為の精度を高めることに注力するべきであって、それは共に「わかりあう」間柄になる最も有力な手立てである。
③ わたしたちの生存環境は狭く、他者の価値観に触れる機会も少ないので、情報技術等を利用しながら新しい価値観に触れることが必要であり、そこから遠くにいる他者と交流を行いながら少しずつ世界を広げる努力を続ける必要がある。
④ わたしたちは「わかりあえるもの」の中に固執することから脱して、「わかりあえない」他者との共に生きる方法を探ることで、フィルターバブルを越境する方法を学ぶことができるため、文化を越境しながら一つの文化に統合することができる。
⑤ わたしたちは「わかりあえなさ」に出会った時に新たな言葉を紡ぐことで、「わかりあえない」他者と共に生きるための価値観を生み出し、互いに「わかりあって」いる関係からでは生まれることのない新たな場にたどり着くことができる。

第3問　次の【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読んで、後の問い（問1～7）に答えなさい。

【文章Ⅰ】　次の文章は、森下典子『日日是好日――「お茶」が教えてくれた15のしあわせ』（二〇〇二年刊行）の一部である。

二十年間茶道を習っている「私」は、具体的な言葉で教えてくれない先生に不満をもっていたが、ある日その真意に気がつくことになった。

茶道の風景を外から見れば、ただ穏やかに座っているにすぎない。しかし、見えない場所で、同時に、別のことが起こっているのだ。

その沈黙は濃密だ。

「……」

胸の熱さと、言葉の追いつかない虚しさと、言葉にしてシラけてしまうことの恐れが、せめぎあいながら、沈黙という井戸の中をのぞいている。そのやるせない感情と、台無しにしたくないという配慮を共有しながら、静かに並んで座っている。

私は、先生と気持ちを共有したような気がした。

先生は、言わないのではない。言葉では言えないことを、無言で語っているのだった。

A 本当に教えていることは、目に見えるお点前の外にある。

先生の家の玄関を開けると、いつも真っ先に、下駄箱の上の花や色紙が目に入る。暑い日は、つくばいの水が多めに流れている。菓子器の蓋をとると、そこに美しい和菓子が並んでいる。床の間には、今朝摘んだばかりの花、そしてかけじく。水指、棗[注1]、茶碗、こぼし[注2]……。

どれ一つ見ても、そこに季節があり、その日のテーマと調和がある。それが、お茶のもてなしだった。

けれど先生は、それを口にしない。だから私は最初、一つかせいぜい二つしかわからなかった。それが、二十年たつうちに、三つ、四つと自分で見つけられるようになった。気づいて初めて、私たちが気づいても気づかなくとも、先生は稽古場にいつ

も深く豊かに季節感を演出してくれていたのだとわかった。

B でも本当は、先生は、まだまだ他にも、いっぱい仕掛けているのかもしれない。

私なら、演出した仕掛けをすべて言いたくなるだろう。だけど、言葉でぜんぶ種明かししてしまっては、伝わらないものがある。

先生は、私たちの内面が成長して、自分で気づき、発見するようになるのを、根気よくじっと待っているのだった。

お稽古を始めたばかりのころ、私が「なぜ？」「どうして？」と質問を連発すると、先生はいつも「理屈なんか、どうでもいいの。それがお茶なの」と言った。

理解できないことがあったら、わかるまで質問しなさいと学校で教育されてきた私は、面食らったし、それがお茶の封建的な体質のように思えて反発を感じた。

だけど今は、そのころわからなかったことが、一つ、また一つと、自然にわかるようになった。十年も十五年もたって、ある日、不意に、

「あ～！　そういうことだったのか」

と、わかる。答えは自然にやってきた。

お茶は、季節のサイクルに沿った日本人の暮らしの美学と哲学を、自分の体に経験させながら知ることだった。

本当に知るには、時間がかかる。けれど、「あっ、そうか！」とわかった瞬間、それは、私の血や肉になった。

もし、初めから先生が全部教えてくれたら、私は、長いプロセスの末に、ある日、自分の答えを手にすることはなかった。

先生は「余白」を残してくれたのだ……。

「もし私だったら、心の気づきの楽しさを、生徒にすべて教える」……それは、自分が満足するために、相手の発見の歓びを奪うことだった。

先生は手順だけ教えて、何も教えない。教えないことで、教えようとしていたのだ。

C それは、私たちを自由に解き放つことでもあった。

「作法」だけが存在する。「作法」それ自体は厳格であり、自由などないに等しい。ところが「作法」の他は、なんの決まりも制約もないのだ。

学校では、決められた時間内に、決められた「正解」を導き出す考え方を習う。早く正しい答えを出すほど優秀だと評価され、一定の時間を過ぎたり、異なる答えを出したり、またそういう仕組みになじめない場合は、劣っているとみなされる。

けれど、お茶をわかるのに時間制限はない。三年で気づくも、二十年で気づくも本人の自由。気づく時がくれば気づく。成熟のスピードは、人によってちがう。その人の時を待っていた。

理解の早い方が高い評価をされるということもなかった。理解が遅くて苦労する人には、その人なりの深さが生まれた。

どの答えが正しくて、どれが間違っている、どれが優れていて、どれが劣っているということはなかった。「雪は白い」も「雪は黒い」も「雪は降らない」も、全部が答えだった。人はちがうのだから答えもちがう。お茶は、一人一人のあるがままを受けいれている。

D 私の意識の中で、オセロ・ゲームの「黒」「白」がグルリと反転した。

あれほど、「人を型にはめるがんじがらめの世界」だと思っていたのに、実はすべてが自由だったのだ。

個性を重んじる学校教育の中に、人を競争に追い立てる制約と不自由があり、厳格な約束事に縛られた窮屈な茶道の中に、個人のあるがままを受けいれる大きな自由がある……。

いったい、本物の自由とはなんだろう?

そもそも、私たちは今まで何と競っていたのだろう?

学校もお茶も、目指しているのは人の成長だ。けれど、一つ、大きくちがう。それは、学校はいつも「他人」と比べ、お茶は「きのうまでの自分」と比べることだった。

私は、ある後ろ姿を思い出した。

八十歳を越えているだろう老婦人が、真っ白い髪を結い、シクラメンの花の色をしたストールを肩にかけて立ち去る光景

……。初めてミチコとお茶会に連れて行ってもらった日、三渓園の庭に面したお座敷で、その人と出会った。

「さっ、私もこれから、もう一席、お勉強してきましょう」

その老婦人は、去り際に嬉しそうにこう言った。

「お勉強って、本当に楽しいわね」

受験のための勉強をしてきた私とミチコには、E 八十過ぎの人と「お勉強」という言葉がどうしてもそぐわないものに思えたものだ。

この世には、学校で習ったのとはまったく別の「勉強」がある。あれから二十年が過ぎ、今は思う。それは、教えられた答えを出すことでも、優劣を競争することでもなく、自分で一つ一つ気づきながら、答えをつかみとることだ。自分の方法で、あるがままの自分の成長の道を作ることだ。

気づくこと。一生涯、自分の成長に気づき続けること。

F 「学び」とは、そうやって、自分を育てることなのだ。

（注）1　棗…抹茶を入れる茶器。

2　こぼし…「茶こぼし」。茶道具の一つ、茶碗のすすぎ水を捨てる器。「建水」ともいう。

（森下典子『日日是好日――「お茶が教えてくれた15のしあわせ」』一部改変）

【文章Ⅱ】 次の文章は、今井むつみ『学びとは何か』（二〇一六年刊行）の一部である。

「たくさん覚えることが大事」というドネルケバブ・エピステモロジー（注1）を親が持つと、できるだけたくさんの知識を効率よく得ることが子どもにとってもよいことだと考える。すると、子どもがじっくりと好きなように遊んだり考えたりするよりも、

ことばで記述された、たくさんの「知識の断片」を覚えることのほうが大事だと思ってしまう。かくして子どもは小さいころから「教えてもらうことを覚える」のに慣れ、それが当たり前だと思ってしまい、生来実践していた「自ら発見する」ことをしなくなってしまうのである。

（今井むつみ『学びとは何か――〈探究人〉になるために』一部改変）

（注）1　ドネルケバブ・エピステモロジー…断片的でも大量の知識を覚える方がよいという考え方。

問1　傍線部A「本当に教えていることは、目に見えるお点前の外にある」とあるが、「本当に教えていること」とはどのようなことか。その説明として、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 18 。

① 理屈を知ることよりも、先人の立ち居振る舞いを見様見真似で覚えること。
② 世の中を生きる上で必要な社会に存在する上下の人間関係とそれに服従すること。
③ 季節に応じたテーマや調和の中から生まれる現在を大事にしながら生きる姿勢のこと。
④ 言葉で伝えるよりも黙ったままでも気持ちを共有することのできる気持ちのゆとりのこと。
⑤ 季節の変化に沿った日本人の暮らしの美学と哲学を、体験することで知ること。

問2　傍線部B「でも本当は、先生は、まだまだ他にも、いっぱい仕掛けているのかもしれない」とあるが、このときの先生に対する私の心情として、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 19 。

① 先生が多くのもてなしを私のためだけに準備してくれているだろうという期待感。
② お茶のもてなしに気づけるようになるまで長い年月を待ってくれていたという信頼感。
③ 多くの先生のもてなしを二十年の時を経ても少ししか見つけられない自分に対しての嫌悪感。
④ 二十年先生に習ってきた中で気づくことができたことも、先生に対して言えない屈辱感。
⑤ お茶を習いはじめたころに言葉で教えてくれない先生に不満を抱えた自分に対する嘲りの感情。

問3　傍線部C「それは、私たちを自由に解き放つことでもあった」とあるが、どういうことか。その説明として、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 20 。

① 早く答えを出すことを求める教育への問題意識から作法のない世界にした方がよいということ。
② お茶を楽しむということを重視するために、作法や手順は自由にした方がよいということ。
③ お茶から学ぶことは、作法や手順を知った後で学ぶ側が自由に決めればよいということ。
④ 手順や作法以外は何も教えないという自由放任で無関心な態度に徹した方がよいということ。
⑤ お茶の稽古で得た自らの答えを見出（みいだ）す余白の時間を毎日の生活に取り入れるとよいということ。

問4　傍線部D「私の意識の中で、オセロ・ゲームの『黒』『白』がグルリと反転した」とあるが、このときの私の心情として、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 21 。

① 長い年月を経て先生が自分のために用意してくれたもてなしの数々に、やっと気づいた感嘆の気持ち。
② お茶の稽古は学校教育と同じく作法ばかりだと思っていたのに、実は自由であったという驚嘆の気持ち。
③ お茶の稽古を通して得た学びは、実はすでに先生が示してくれていたものだったという感心の気持ち。
④ 長い年月を経て教わっていたことが、かなり前の時点で理解していたことに気づいた自分への不満の気持ち。
⑤ お茶の稽古で学校教育との違いを理解したのに、実は基本的なことを共有していることに裏切られた気持ち。

問5　傍線部E「八十過ぎの人と『お勉強』という言葉がどうしてもそぐわないものに思えたものだ」とあるが、なぜか。その理由として、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 22 。

① 美しいストールを身に着ける八十歳過ぎの老婦人には必要のない言葉だと思ったから。
② お茶の稽古での様子や立ち居振る舞いから老婦人の勤勉さが目に浮かぶようだったから。
③ 学校で行われる家庭科や技術科などの訓練を伴う学習というイメージがあったから。
④ 学校で行われる上級学校を目ざした受験に関するものというイメージがあったから。
⑤ 学校での部活動や授業といった学校生活全般に関するものというイメージがあったから。

問6　傍線部F「『学び』とは、そうやって、自分を育てることなのだ」とあるが、このときの私の心情として、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 23 。

① 先生のもてなしに気づけるようになった自分に誇りをもち、これからもお茶の稽古を続ける中で人間的な成長をして、先生に少しでも近づきたいという気持ち。

② お茶の稽古でこれまで受けてきた学校教育との違いに気づき、作法や規則の大事さは認めつつ、今後は思うままに自分の可能性と成長を追求したいという気持ち。

③ お茶の稽古でこれまで考えていた学びとは違う意味の学びがあることに気づき、これからは自分の成長に気づきながら自分自身を育てていこうとする決意の気持ち。

④ 先生のもてなしに気づけるようになったことで、将来的には先生のように師範になって生徒を持つまで成長できるように頑張っていこうという気持ち。

⑤ お茶の稽古でこれまで考えていた学校教育との相違点に気づき、作法や規則の窮屈さに辟易（へきえき）としていた過去の自分を思い出し、今後は自由に生きようという爽快な気持ち。

問7　Sさんは【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで「学校での学び」について自分の考えを整理するため、次のような【メモ】を作成した。これについて、後のⅰ・ⅱの問いに答えなさい。

【メモ】

〈1〉学校での学び

【文章Ⅰ】私「学校では、決められた時間内に、決められた『正解』を導き出す考え方を習う。」

【文章Ⅱ】親「たくさん覚えることが大事」

子「 X 」機会を失う。

⬇

〈2〉まとめ

【文章Ⅰ】私が先生の稽古の本来の目的に気がつくことが遅かった理由

「 Y 」

i　Sさんは〈1〉を整理した。空欄 X に入る最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。解答番号は 24 。

① じっくりと自分のタイミングで考えたり遊んだりする
② 自分で勉強することを考え、選択する
③ 勉強や遊びなど、効率よくものごとを行っていく
④ 知識を体系的にとらえ、大きな文脈で考える

ii　Sさんは〈1〉を踏まえて「〈2〉まとめ」を書いた。空欄 Y に入る最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。解答番号は 25 。

① 私がこれまで受けてきた授業は限られた時間で決められた答えを出すものであって、自らの答えについて絶対的な正解の自信があるところまで思考するため時間がかかったから。
② 私がこれまで受けてきたお茶の稽古は、季節のサイクルに沿った日本人の暮らしの感覚を大切にしているものなので、季節ごとに違う先生のもてなしに気づくことが遅かったから。
③ 私がこれまで受けてきたお茶の稽古は、作法や規則を教えることを大事にして多くの時間をかけているので、先生の稽古の本来の意図に行きつくまで段階を踏む必要があったから。
④ 私がこれまで受けてきた授業は断片的な知識を覚えるようなものが多く、お茶の先生にも同じような指導を求め自ら考えることを怠り、先生の稽古の意図を「自ら発見する」ことが遅かったから。

【解答】

国語	
問題番号	正解
1	5
2	1
3	3
4	4
5	2
6	3
7	5
8	1
9	2
10	4
11	3
12	4
13	1
14	5
15	2
16	3
17	5
18	5
19	2
20	3
21	2
22	4
23	3
24	1
25	4